

山岳科学総合研究所 友の会会報

2015年1月 第16号



御嶽山噴火でスキー場運営休止に追い込まれひっそりたたずむ王滝村

もくじ

年頭の御挨拶	2
未だ傷は癒えず、されど私たちはがんばります 立花裕美子	2
「第4回フォーラム古道徳本峠道を語る会」に参加して 酒井國光	4
会員集会・第7回憧憬の森講演会を開催しました	5
思い出の山行(山本信雄さんを悼む) 奥原仁作	7
編集後記	8

年頭の御挨拶

友の会の皆様新年あけましておめでとうございます。

昨年は大規模な自然災害に見舞われた一年となってしまいました。特に9月27日の御嶽山噴火で多くの登山者が亡くなり、我々山小屋経営者はとても他人事には思えず明日は我が身かも・・・という思いを強く感じた一年でした。

又、夏から秋の登山シーズンには台風の影響で各山小屋では多くのキャンセル続出となってしまい、改めて我々の商売はお天気次第でどうにでもなってしまう世界なんだと改めて認識しました。

友の会の行事では、9月上旬の会津磐梯山(1819m)登山がとても印象深く残っております。山頂までガスの中、黙々と頑張って3時間程かけて登り、全員が到着する頃、あたかもその時を待っていたかのように、ガスが晴れ渡り、眼下には猪苗代湖、会津盆地と望むことが出来ました。友の会の皆様のお陰?と感謝申し上げます。

本年度は加賀の白山登山を予定しております。めったにないチャンスですので、ぜひチャレンジして下さい。

今年こそ、未年のイメージのように穏やかな、温かい一年となるよう願ってやみません。山の神様どうぞ御手柔らかにお頼み申し上げます。

友の会の皆様これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

友の会会長 山口 孝



第16回現地研修会磐梯山五色沼にて

未だ傷は癒えず、されど私たちはがんばります

この度の御嶽山噴火につきましては、全国の皆様から大きなご支援や励ましのお言葉を賜り、御礼申し上げます。犠牲になられた皆様のご冥福をお祈りするとともに行方不明の方々が一日でも早くご家族のもとへ戻られることを祈っております。

信州大学山岳友の会の皆様にもお心を寄せていただいておりますこと、心より感謝申し上げます。

9月27日午後0時30分頃、村内の防災無線から「御嶽山噴火、消防団員出動」の放送が流れました。私は午後1時からのイベント出席に向けて早昼を済ませ、家でパソコンをやっていたところでした。一大事と思い、すぐ役場へ向かいました。庁内には数人の職員が慌ただしく動いていました。山頂付近にある山小屋から消防主任へ入ってくる無線は、信じられないような言葉もあり、何がどうなってそのような状況になるのか…頭の中は混乱状態でした。とはいえ、何かできることはないか?と思い、刻々と入って来る情報を黒板に書き留める

役を受けました。

奥ノ院、王滝頂上、八丁だるみ、頂上山荘 e t c…ここ10年ほど年に10回以上登っている山なので、地理的な状況は頭に浮かびます。しかし、その場で起きていること―「足切断」「灰に埋もれている」「動きがとれない」「助けに外へ出ることさえできない」などが、日本語としては理解できるのですが、信じられない・信じたくない言葉で、胸が押しつぶされそうでした。

頂上山荘の小屋番（小屋総支配人と言われる人）は、村の人で、山に上がった時は一緒に飲んだり、レースに出た時は頂上付近で叱咤激励してくれる人でした。噴石で肩のあたりをけがしていましたが、足は大丈夫で下山しようと思えばできました。しかし、小屋へ避難してきた登山者が動けないため、そのまま小屋へ残らざるを得ない状態でした。

そんな中、その人が「噴煙がさっきより多くなった。本当に大丈夫なのか？」と無線で聞いて来た時は、何と返事をしていいのかわからず、無線を受けた消防主任と二人、深いため息と顔を曇らせるほかはありませんでした。

今回の噴火で一番感じたのは、搜索に当たる自衛隊、消防、警察の方々の精一杯の仕事ぶりです。夜明け前に出発し自らの足で登った上で、過酷な作業に当たられる、防寒や滑り止めなどの装備もそこそこに氷点下にもなるような山頂の搜索に向かわれる方々です。毎日ただただ頭の下がる思いでした。

反面、報道関係者の行動には眉をひそめるものが多かったです。仕事場の役場庁舎にずけずけと上り込む、村民の心にも上り込む、被災者やその家族の心の中にも上り込んでいました。みんな噴火で疲れて傷ついているのに、コメントが欲しいばかりでしつこくぶら下がっていました。

二ヶ月以上過ぎても、だれか「王滝を元気に」する活動をしていないか、または噴火で意気消沈している人はいないか等々、村内各所で取材が絶えませんが、村民の生活自体は徐々に落ち着きを取り戻しつつあります。ただ、村のスキー場の約半分が立入規制区域（噴火口から4 km）であるため、今季の営業はできなくなりました。村民の2割が冬場はスキー場関連の業種に就いている村としては、雇用対策が喫緊の課題といえます。

噴火後、私は自分の思いをメモ書きしてきました。

1. 噴火が鎮静化すること
2. スキー場が営業できること
3. お客が来てくれること
4. 旅館や民宿が営業を続けられること
5. 噴火が原因で村を離れる人がいないようにすること
6. 村民が心豊かに暮らすこと

1と2は今のところ叶いそうにありません。今は3～6を実現させるべく、考えて行動していこうともがいているところです。

私達の村は財政問題で、全国的に報道されてきました。その暗いトンネルからやっと抜け出そうとしていた矢先のこの噴火です。誰が言い出したか「戦後最悪」という枕詞も定着してしまっています。御嶽山を「おやま」と呼び「御山」として大切にしてきた私達は、「おやま」を恨んだりはありません。これから

も大事な「おやま」と上手に暮らしていきたいと思っています。

何千万年、何億年という山の歴史も中では今回の噴火は、ほんのちっぽけな出来事でしょう。大自然の中で、人間は無力かもしれません。でも精一杯「おやま」と共に生きたいと思っています。

みなさんのお知恵やアドバイスをお聞かせいただければ幸いです。

王滝村 立花裕美子

「第4回フォーラム古道徳本峠道を語る会」に参加して

このフォーラムに参加するのは三回目だ。そして、今回は今までとは少々趣を異にしている。フォーラムの中での講演を頼まれているからだ。山の中での話なので、やはり登山に関する方が良いだろうと、演題は「私はこんな雪山登山をしてきた」とした。ただし副題があり「黒部川流域の山々編」だ。実は同じ演題で副題「槍・穂高の山々編」も作ってあるのだ(こちらは12月21日の憧憬の森講演会用として)。

11月1日朝、上高地に着くと雨だった。一人で峠への道を歩きながら何度自問を繰り返しただろうか。「穂高へ来て、黒部の話は変じゃないの？」…と。

峠の小屋に着くと、すでに多くの人が集まっていた。すぐにビール、日本酒、…、参加者の顔を見ながら飲むほどに「黒部でいいんだ」との決心が固まった。50分間ほどの講演では、雪の黒部川流域の山々の普段登山者が目にする事の少ない写真を見て頂いた。ご清聴有難うございます。

2日、すでに紅葉が終った島々谷へ下る。今日の作業の中心は架橋だ。昨年シーズンオフに架けた物が、今春の雪崩で二つに折れてしまった。その下流50m程の場所に新しい橋を作るのだ。

作業の様子は写真で見て頂くとして、20余名が3時間近くも休みなしに働いて橋は完成した。その間雨が降らなかったのは幸いだった。

昼食後、一足早く二股へ向かう。今回も蛇籠に砂利を入れること位しか手伝えなかったが、一仕事終えた満足感に浸りながら、昔の山行を振り返った。この道は、1960年代後半、涸沢での夏合宿の帰路の峠越え、滝谷出合での定着合宿に入る際長駆「島々～峠～蝶～常念～槍～笠」を縦走、正月合宿の「島々～峠～大滝手前から徳沢園へ」などなど思い出が多い。

「健康寿命」という概念があり、現在の日本人男性の平均は71.9歳とか。私は今75.5歳。まだこうして山を歩いていられる。嬉しいことだ。これからも私の健康寿命を延ばすためにも、この歴史ある「古道徳本峠道を守る人々」の主旨に賛同し、ささやかな協力をしていきたいと思っている。

日本山岳文化学会副会長 酒井國光

【報告】 会員集会・第7回憧憬の森講演会を開催しました

12月恒例となりました、会員集会と憧憬の森講演会を会員50名弱が参加し、信州大学理学部大会議室において開催されました。

集会に先立ち、大学が主催する「信州フィールド科学賞授賞式」があり、独立行政法人土木研究所・西井稜子氏が受賞され、同氏が受賞論文「山岳地域における大規模土砂崩壊の斜面変形プロセスに関する研究」と題し講演をしていただきました。



会員集会では今年度の活動実績を踏まえ、来年度の事業計画素案を検討していただきました。

講演会は会員の酒井國光さんを講師にお願いし、「私はこんな雪山登山をしてきた」と題し、多数の記録写真とともに、度重ねた素晴らしい雪山登山の話をしていただきました。

この後会場をいつもの「萬来」に会場を移し会員交流会となるわけですが、参加者は過去最高の三十数名となり、盛会を極めました。

この会場で山口会長から「御嶽山災害で苦しんでおられる王滝村を気持だけでも応援しよう募金」の提案があり、参加者から6万円の浄財が寄せられ、早速王滝村会員の澤田さん・立花さんにお渡しし、翌日彼らから王滝村瀬戸村長に渡していただくことができました。



講演中の酒井さん



新入会員の自己紹介

王滝 北アルプスの山小屋関係者や登山愛好者らでつくる、信州大学山岳科学総合研究所友の会（山口孝会長）が24日、王滝村に御嶽山噴火の見舞いとして6万円を寄付した。友の会は、昨年5月に御嶽山麓で現地研修会を行い、村内の滝越地区や木曾町開田高原を巡った。21日に35人

が出席した会の交流会で、復興を願う募金を行い、村内に住む会員の立花裕美子さん（54）と上条（58）と沢田義幸さん（58）が村役場を訪れた。立花さんは「現地研修をした地域を心配して、募金をするのになった」と説明した。瀬戸普村長は「ありがたいこと」と感謝していた。（土屋智彦）

復興願い村に見舞金 信大山岳科学総研友の会



瀬戸村長に寄付金を手渡す立花さん(右)

(2014年12月25日付市民タイムス記事)

信州大学山岳科学総合研究所 友の会事務局 会長 山口 孝 様

この度の御嶽山噴火災害に際しましては、早速丁寧なお見舞いと温かい励ましのお言葉をいただき、誠にありがとうございました。

今回の災害は、好天に恵まれた休日の正午前に発生し、多くの登山者を巻き込む、戦後最大の火山災害となりました。約3週間に亘り自衛隊、消防、警察による懸命な搜索、救助活動を実施しましたが、未だ行方不明者が残るなかでの搜索活動の中止は断腸の念極まりなく、大自然に対し、人の無力さを痛感するところであります。

御嶽山の火山活動は今なお継続しており、当村の観光産業は大変厳しい状況となっております。今後は、今回の災害により犠牲になられた皆様方、負傷された皆様方、ご家族、ご親族様のお心に寄り添いながら、復興に向け万全を期する所存であります。

末筆になりますが、皆様のご健勝をご祈念申し上げ、お礼のあいさつとさせていただきます。

平成二十六年十二月

王滝村長 瀬戸 普

王滝村長からの礼状



山口会長から王滝村
への見舞金の贈呈

思い出の山行(山本信雄さんを悼む)

7年前の盛夏だったと記憶している。

山本さんと当時森林管理署に勤めていたS氏、それに私の3人は、ある古道を探しに小倉(安曇野市=旧三郷村小倉)の林道終点から大滝山に向かって歩いた。この日は天気も良く、樹林帯に入るまで夏の強い日射しは体中の汗腺を全開にした。

上高地側の登山道と違って通る人も少なく、灌木や草に埋もれそうな細い道だったが、この道すがらはかつて槍ヶ岳を開山した播隆上人も辿った道だ。

そして交易の道であり文化交流の道として、信州・飛騨とを結ぶ「飛州新道」の一部でもあるのだ。この道を辿るのがこの山行のテーマだった。

林道終点から30分ほどで冷沢に至った。この沢は島々谷川北沢の流域だが、その流れは導水路によって尾根を越し、烏川流域(安曇野市=旧堀金村)方面に導かれていた。石高を競った安曇野、年貢や水をめぐる争議は史実に刻まれているが、水利権がらみでまさかこんな場所まで水を求めに来たとはと感心したものだ。

鍋冠山は松本方面から見るとまさに鍋をひっくり返したような格好をしているが、歩いてみると東西の長い尾根(八丁ダルミ)がだらだらと続く。

大滝山も特徴のない山容だが、稜線付近や蝶が岳へと続く登山道沿いにはお花畑が広がり、行き交う登山者も少ないこともあって保存状態は良かった。

夕方早めに大滝山荘に靴を脱いだ。泊り客は私たち3名のみ。盛夏一月のだけの営業ということだった。いま思い起こせばちょっと不愛想な管理人が淡々と業務をこなしていたが、何とも会話はかみ合わなかった。

食事後私たちは部屋に入り、管理人の悪口を肴に焼酎を飲みながら次の日の作戦を練った。古い地図や山本さんの話などから、とりあえず中村新道(尾根筋を徳本峠に向かう道)を下り、途中から上高地側を踏査しよう、ということを確認し、ほろ酔い気分を外に出て松本盆地の夜景を眺め、さざめく天空の星を仰いで早めに就眠した。

次の日、意外や天候は下り目。早めに小屋を後にし、中村新道を急いだ。槍見台の辺りで意を決し笹藪へ突入。古い道跡を探したが何せ件の道はいまから170年も前に廃道になっている。

ササの中では見つけにくいと、ササが無い場所を右往左往して探していると、なんとちゃんとした道形が見つかったのだ。

その場所は比較的地形のよい場所で、小さな尾根沿いに幅1.5m以上、長さも50m以上にわたって現存していた。前後は笹藪の中に消えどこに伸びているのかは確認できなかった。

あの古道を発見した時の喜びは今でも覚えている。この道を作った人々、この道を通った旅人の姿が古い映画のように浮かんでは消えた。私たちはしばらく留まり、写真撮ったり道幅を測ったりした。

そのうちに雨が強くなってきてカッパは着たものの、ササのあくで真っ黒になり古池沢を下山し上高地にたどり着いたのは夕方近かったと思う。

陸上における移動の手段は「徒歩」だけだった時代。峻険な山中を信州から飛騨まで歩道開削を目論んだ往時の人々に思いをはせる山行だった。

この山行を計画し、声をかけてくれたのが山本さんだった。彼は旧安曇村の資料室に勤め、安曇村史編纂にかかわった。若いころ上高地のゴミ拾いアルバイトやビジターセンターにも勤務。持ち前の学究心もあって必然的に自然や地史などに造詣を深めた。

平成 17 年安曇村は近在の 3 村とともに松本市に合併した。山本さんは合併後、資料室がその務めを果たしたということで閉鎖されることとなり、退職を余儀なくされた。

旧安曇村には計り知れない功績を遺したが、誰にも媚びることもなく、淡々と確実に物事を進めていく。大学を卒業して以来一貫して旧安曇村にかかわり、真実・事実を求める姿は終始変わることはなかった。

その彼が昨年 12 月自宅で亡くなっていた。誰にも看取られることもなく、膨大な資料や書籍などに囲まれての孤独死だった。享年 58 歳。厚誼に感謝し、いまはただ心からご冥福をお祈りしたい。

【飛州新道】

岩岡村庄屋伴次郎の目論見を、工事の実務者となって開削したのは南小倉村の中田又重(播隆上人の槍ヶ岳開山を支えた人)。文政 3 年(1820 年)着工、天保 6 年(1835 年)完成。小倉から鍋冠山、大滝山、槍見台、徳沢、上高地、中尾峠、中尾へとつながる。地形急峻にて地質脆弱個所を通るため、土砂災害に見舞われ、わずか 10 年ほどで廃道になったという。

奥原仁作

編集後記

寒中とはいえ日当たりのよい田んぼの畦道には、オオイヌノフグリが小さな花を付けていました。

昨冬は 2 月に大雪が降り、交通網は大混乱。まだまだ油断はできませんが、山には雪があって当然。豊かな恵みとともに穏やかな一年であってほしいと願うものです。

友の会は参加することでその意義が高まります。会員諸氏の積極的なご参加をお待ちしています。

山岳科学総合研究所友の会会報 第 16 号
発行日：2015 年 1 月 28 日
発行：山岳科学総合研究所友の会
〒390-8621 長野県松本市旭 3-1-1
山岳科学総合研究所友の会事務局
FAX：0263-37-2438
E-mail：suims@shinshu-u.ac.jp